HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 序 遍在するリスク |
| Author(s) | 高橋, 吉文 |
| Citation | メディア・コミュニケーション研究, 61, 1-3 |
| Issue Date | 2011-11-25 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/47571 |
| Type | bulletin (article) |
| Note | リスク・シンポジウム特集 : 遍在するリスク |
| File Information | MSC61_001.pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 序　遍在するリスク

高　橋　吉　文

本リスク･シンポジウム特集は、2010年９月29日（水曜）18：00-21：00、北海道大学情報教育館３階多目的中講義室で開催された、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院主催のリスク・シンポジウム「遍在するリスク」Risk-Symposium：Ubiquitous Risks において発表された諸研究をもとにして、それぞれが各テーマを深め書き換えたものである。

リスク・シンポジウムでは高橋吉文が司会をつとめ、発表者５人（高橋が２回）が以下の順番、タイトルで発表を行った。まず最初に高橋が「多様なリスク概念」と題して、現代のリスク概念の基本的状況をみはらし、解説する導入を行った後、４人が異なるテーマでリスクに関する考察を行った。

高橋吉文　　導入発表　　多様なリスク概念
北見幸一　　クライシスに潜むリスク ―― 企業不祥事からの考察
鍋島孝子　　ルワンダ虐殺にみる紛争予防の失敗
　　―― 国際政治にとっての民族紛争のリスク概念
金山　準　　リスクと社会連帯
高橋吉文　　Hypotheses fingo（仮説を虚構する）―― ルーマンの不確実性三変化

それに基づく本［リスク・シンポジウム特集：遍在するリスク］は、最初に企業ブランドのITによるリスクへの対策､アフリカの民族対立における予防原則といった比較的目に見えやすい具体的なリスク現象を最初におき、その後により抽象性の強い、より根本的なリスクの問題を、最初に19世紀における社会保障の成立経緯において、次に20、21世紀リスクの破局性において論じている。

北見による論文は、ネットを中心とした社会による企業姿勢批判リスクの検証という基本姿勢はかわらぬものの、とりあげる事例は大きく変更し、ネット上でのブランドへの批判的書き込みへの対応、いわゆる「リスク・コミュニケーション」において、その企業が蓄積してきた

企業ブランドのロイヤルティ（商標への誠意）が肯定的な機能を発揮する事象が検証されている。社会から厳しい批判や制裁等を企業が受けた場合であっても、社会的に認知されている商標には、そこからのより速い回復を促進する蘇生･防御能力が内包されている。これは、「リスク・コミュニケーション」が企業のたんなるクレーム処理等の技術的次元にとどまるべきものではなく、企業の社会的責任と深く関わることを示唆するものである。

鍋島による論文が扱うのも、アフリカにおける泥沼のような民族紛争という異なる対象とはいえ、極めて具体的なリスクのプロセスの検証である。どのようなタイミングで、どのような方向へと、憎悪の連鎖運動が発進、拡大されていったのか、危険を惹起する諸条件を機能の束のように還元して、「失敗学」（畑村洋太郎）的な立場からそれらを客観的に腑分けすることを試行している。「失敗学」というものを予防原則に帰結する人間の叡智の集積と考えうるならば、現在アフリカで起きている収拾不能の悲劇にいたったプロセスの解析は、深くもつれていて困難を極めるとはいえ、環境破壊による食料危機、生存条件の悪化、資源争奪に端を発する未来の私たちの地球の姿、将来の、先進国発展途上国あい入り乱れての凄惨な生存競争や争いを先取りしていると想定される時、リスクの予防原則の観点から、その経緯の危険条件の抽象的抽出は、きわめて重い予言的意味をもってくるはずである。

具体的な出来事に対する具体的な分析を中心とする上記の二論文に対して、後半の二論文は、いわゆる社会なるものに生々しく渦巻く不確定性という不気味かつ危険なものを前にして、社会というシステムともいうべきある総体が、それにどのように対処し何らかの安定性を獲得していこうとしているのか、というより抽象的な問題をテーマとしている。

金山の論文は、19世紀を襲う失業による巨大な不確定性がリスクとして認識された時、「連帯solidarité」概念に依拠して社会保障制度が導入され、リスクの分散と制御、秩序形成が国家的に遂行されていった経緯の素描を、社会をシステムとして把握した開祖であるデュルケームを中心に行っている。デュルケームは、連帯概念に確率論を連動させることで、労働者たちを集合的に管理する道を拓き、不確定性に満ちた世界に一定の安定性が保証される。現在の私たちは、保険や各種社会保障といった、確率という集合的リスク対応策によって不確定性を馴致していったその「連帯」の恩恵に浴しているのである。

だが、そうした近代のリスク管理システムは、メディアの発達、グローバル化等による境界の曖昧化、国内産業の空洞化、人権や個人化による離散化傾向の進展等に伴い、現代、その統一体を保ちえず破綻しかけている。これまで近代制度を支えてきたリスク図式[安全／リスク]が、無効化しつつあるのである。

高橋の論文は、リスク・シンポジウムにおける発表原稿を大幅に改変し、分量的にも大きく拡大されたため、全体への見晴らしと後半部「その２」への導入となる前半部となる「その１」

のみを掲載している。ここでは、旧図式から新図式［リスク／危険・破局］への移行を主張し、それに基づいて社会システム理論を構築しようとした20世紀末のドイツの社会学者ルーマンの、破局に等しい不確定性の極み（世界）を前にした戦略の解明が試みられている。制御不能な危険が、より安全とみえる制御可能なリスク risk へとすりかえられる。だが、それはどのような操作によって可能となるか。新時代の不確定性対策はどのようになされようとしているのか。危険な不確定性を擬似的な不確定性へと抽象的にすりかえる多重の隠蔽装置として、ルーマンのシステム理論が解読される。ルーマンのその壮図は、だが、実践的な「失敗学」の範疇を大きく離れ、近代及び現代社会の存立原理や、未来に関わる人類の根源的な戦略次元に関わるものとなる。

その人類は、古来破局の中で生きのびてきた。現代科学のとどまるところを知らぬ進化にもかかわらず、2011年の3.11以後、私たちは明らかに、不確定性の隠蔽に腐心していた太古の地点に、今また引き戻されている。その時、現在多様なケース、多様な場において、多様な姿で人々の関心をひいているリスクという言葉は、絶望とそれにめげずにサバイバルしようとする未来とがせめぎ合う「危険社会」の扉を、正しく開けるための鍵であるにちがいない。